

株式会社生田

当社は本革を使ったランドセル専門の製造販売会社。ランドセルは1本と数えるのですが、1本1本を自社で手作りしています。私たちが子どもの頃は、ランドセルは革製でしたが、クラリーノなどの人工皮革が登場。軽くてシワになりにくく、カラーバリエーションも豊富で、防水といった機能も付加した人工皮革ランドセルの人気が高まり、一時は本革ランドセルの市場が激減しました。ですが、数年前から、あえて本革を求める方が増え始めています。革は使う人によって色の風合いやシワなど変化もさまざま。子どもの成長や経験がランドセルに刻まれ、何ともいえない「経年変化」が現れ、本物の「あじ」を大切にしたい、または子どもに本物を知ってほしい

専務取締役

長井宏治さん

子どもの成長とともに
革の良さを生かした
ランドセルを作りたい
子どものが増す。

いという方に支持されています。

工房では革を必要なパーツごとに裁断し、ミシンや手で縫い合わせ、組み立てて作るので、時間も手間もかかります。それでも手作りにこだわるのは、6年間使い続けられる頑丈な品質を維持するため。愛情込めて作ったランドセルには、なんとも言えない温もりがあると思っていますし、その思いが子どもたちに伝わればうれしいですね。

ランドセル選びは、今や冠婚葬祭に並ぶ大イベント。おじいちゃん、おばあちゃんも含め、家族みんなで選び、子どもの成長をお祝いする意味合いが強くなっています。カタログやネットで選ぶのではなく、実際に実物を見て、背負ってみて、選んでもらう。ランドセルを通じて、家族で楽しんでもらうことが、当社の思いです。工房を開き見学できるようにしたのも、職人たちの丁寧な作業を見ただきたいし、思い出作りをしていただきたいですから。

少子化の波は、ランドセル業界にも不安な影を見せています。市場規模が確実に小さくなっています。それでも、ランドセル文化を後世に残すために、お客様のご意見をもとに、毎年、改良を重ね、背負いやすさや部材の新機能など、より良いものを追求していきます。海外での展開や大人向けアイテムなど、新しいことにもチャレンジしていきたいですね。



ランドセルは、元々幕末にオランダから入ってきたバッグパックのオランダ語呼称「ランセル」がなまつたとされています。

本革は人工皮革とくらべて、革の厚み調整や伸び具合の見極めが難しい。



我が社の自慢

工房でワークショップや見学会を開催 ランドセルができあがる過程を公開!



以前はショールームの奥に工房があったが、道をはさんだ向かいに新しく工房スペースをオープン。ランドセルがどのように作られるのか、職人の作業風景をいつでも見ることができる。また月1回、職人による工房案内と端材の革を使ったワークショップも開催。イベント情報をSNSで発信している。



革裁断から仕上げまですべて職人が手作業で作るランドセル

ランドセルの購買数は年間約100万個と言われるが、そのほとんどが人工皮革を使用したもの。本革を使ったランドセルの市場は非常に小さいが、本革のもつ風合いや経年変化など本物志向の方が増えつつあり、2015年に10%程度だった市場が2016年には約20%と徐々に拡大傾向にある。

地元の方から「生田カバン」「生田ランドセル」と呼ばれ親しまれている同社。創業は1950年代にかばん製造で始まり、現在は本革のランドセルを年間3000個以上も製造する。ランドセルができるまでには、革の裁断、縫製、貼り合わせ、仕上げなど200以上の工程を経なければならないが、そのすべてを自社工房で、18人の職人で分担して行っている。

お祝い品や記念品という“ハレの日”に贈られるものには傷や筋のない美しさが求められる。加えて、最近では撥水加工や防シワ、軽量化など人工皮革と同様の機能を求められることもあり、同社では皮革業者とともに機能付加や品質改良を行うことも。職人による手作りというアナログ、時代に応じた変化への対応という、相反する2つを両立させていることで多くのお客様に支持され、安定した売り上げを維持できている。

ここ数年、ランドセルの購入時期は早く、4月から始まり7月にピークを迎える。同社はすべて、職人による手作りなので1日にできて15本程度しか作れない。6年間、大切に使いつづけてほしいという思いをこめて、丁寧に丁寧に作り続けている。

株式会社生田

<http://www.randsel.jp/>
〒544-0011 大阪市生野区田島6-2-16
TEL 06-6757-6723 FAX 06-6757-6760
事業内容／ランドセルの製作(自社工房で職人が手作業で作る生田ランドセルを製造・販売)